

技術解説

# 直売所向け花きの栽培

## ・・・ アスターの栽培 ・・・

和歌山県農業協同組合連合会 営農対策部 辻 圭索

アスターは、中国北部の冷涼な乾燥地帯原産のキク科の草花で、春タネをまいて夏から秋にかけて花を咲かせて枯れる「春まき一年草」として扱うのが一般的です。

直売所での花きの販売は、魅力ある品目のひとつです。その中でも仏花の需要が安定していて、ちょうどお盆の頃に開花して花持ちがいいアスターは直売所にとって欠かせない切り花となっています。

そこで今回は、アスター栽培のポイントについて紹介します。



### 1 品種

花の色や咲き方、花の大小や草丈など、非常にバラエティーが豊富で、草丈の長いものは切り花に、短いものは鉢植えや花壇苗として利用されています。花の色には、紫藤色、紅、ピンク、白などがあり、咲き方では、八重咲きやポンポン咲きなどがあ

ります。また、最近では花形も豊富になってアレンジや花束としても人気が高まっています。

#### 【くれない系】

早生～中晩生まで品種が豊富にあり、草姿はボリューム感があります。

#### 【松本系】

くれない系よりやや早く開花し、萎凋病に対する抵抗性があります。

#### 【こまシリーズ】

ガーベラのような花で豪華な感じですが、降雨や多湿にやや弱いので施設栽培向けです。

#### 【小輪系】

小輪多花（花茎 1～3 cm）で、種子（ステラシリーズ、ネネシリーズ）での販売のほか苗（マイクロシリーズ、アレンジシリーズ）でも販売されています。

### 2 栽培条件

アスターは、浅根性のため乾燥や過湿に弱いので、耕土が深く腐植に富んだ排水のよい土壌を好みます。

また連作を嫌うため、同じ場所での栽培は 4～5 年間あけるか、土壌消毒を徹底する必要があります。

pH6.0～6.5 の弱酸性を好み、酸性が強いと土壌病害が発生しやすくなります。

発芽適温は 15～20℃、生育適温は 10～25℃で、タネまき後 110～120 日くらいで開花してきます。

### 3 栽培管理

#### 1) タネまき

7 月中旬切りの場合は 3 月中旬、8 月中旬切りでは 4 月中旬、9 月中旬切りは 5 月 20 日頃のタネまきが目安になります(図 1)。

発芽適温が 15~20℃なので、気温の低い 3 月まではトンネル内にまきます。外気温が低くても、晴天時のトンネル内温度は高くなるので、25℃を超えないように換気を行います。5 月中旬まきでは、長日と高温で開花が早まるため、直まきにして少しでも草丈を得るようにします。

土壌病害に弱いため、育苗には消毒済みの土を用います。タネの必要量は 1 アールあたり 20~30ml です。5cm 間隔でスジまきし、タネが見えなくなる程度の覆土をしてから、たっぷりとかん水しておきます。

タネまき後は、新聞紙などで覆い土の表面を乾かさないようにし、発芽し始めたら早目に取り除きます。

#### 2) 育苗管理

発芽後のかん水は、土の表面が乾いたらやる程度にし、過湿にならないよう注意します。本葉が展開する頃までは徒長しやすいので、夕方には土の表面が少し乾いた状態になるような水管理をし、夜間は保温に努めます。

苗が生長してきたら、葉が重ならない程度に順次間引きし、最終的には株間 5cm 程度まで間引きます。本葉 4~6 枚 (20~30 日) 程度になる頃が定植時期となります。

定植の約 1 週間くらい前から夜間の保温をやめ、徐々に外気にならしておきます。

#### 3) 定植

苦土石灰や堆肥を早い目にすき込み、定植 5 日前頃までには基肥を施用して畝立てをしておきます。

苗の定植適期は本葉 5 枚前後で、本葉 10 枚以上の老化苗になると活着が悪くなり、品質低下の原因になるので注意します。

小輪系では、株間条間ともに 15cm 程度とし、一般系のものは 20~25 cm になるように定植します。

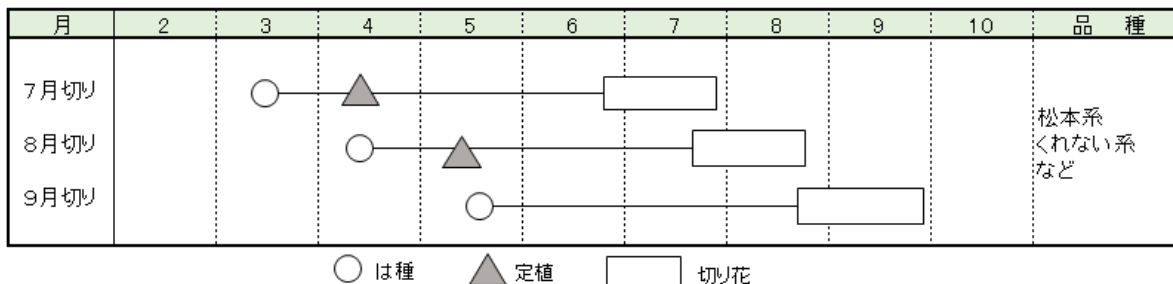


#### 4) 栽培管理

草丈が 20cm くらいに伸びた頃 (定植 20~30 日後)、株もとから少し離れたところに追肥を施し、除草を兼ねて土寄せをします。土が乾くと十分な草丈が得られないので、かん水を充分行うとともに、ピートモスやバーク堆肥を株もとに敷いて乾燥防止に努めます。

切り花が曲がると商品価値が損なわれるので、支柱とハウスバンド及びフラワーネ

図 1 アスターの作型



ットで芯が曲がらないように管理します。

支柱を畝の端から 1.5～2m 間隔に立て、フラワーネットを張り（マス目は定植間隔と同じものを使用）、四方をハウスバンドで囲います。フラワーネットを定植前に設置し、ネットのマス目を定植位置の目安にするといいでしょう。草丈が伸びるたびに、草丈の半分ほどの高さにネットとバンドを上げていきます。

#### 6) 施肥

チッ素過多になると茎が軟弱になり、水揚げが悪くなるので、前作の肥料の残りなどを勘案して施肥を行います。

表 1 施肥例 (kg/10a)

	チッ素	リン酸	カリ
基肥	9	1 2	6
追肥	6	3	9
成分量	1 5	1 5	1 5

和歌山県花き栽培指針より

初期の生育が旺盛な場合は、追肥の量を減らして、生育の様子を見ながら液肥で管理管理します。

#### 4 収穫・調整

3～4 輪（高温時は 2～3 輪）開花した頃が切り花の適期ですが、直売所用ではもう少し開花が進んでからの方がボリューム感がでます。

切り花は葉が乾いている時に行い、3 時間程度水揚げをした後に束加工します。

#### 5 主な病害虫

##### 【萎凋病】

発病初期には葉の片側が黄色になって変形したり、茎が片側に曲がったりする場合があります。その後、茎葉がしおれて枯死する。

生育後期に発生する機会が多いが、苗のころからも発生する。連作を避け、発病株や収穫後の残渣は、ほ場外に持ち出して焼却する。

またチッ素肥料の過剰が発病を招くので、適正施肥に努めるとともに、酸性土壌で発生しやすくなるので、有機物とともに苦土石灰や炭カルなどを施用して適正酸度 (pH6.0～7.0) を維持する。

##### 【立枯病・苗立枯病】

苗に発生して、立ち枯れをおこす。予防として薬剤による種子消毒を行う。

##### 【斑点病】

生育後期から茎葉に発生する。はじめ不整形の小さな褐色斑点ができ、その後やや円形で、周辺は不整形の褐色の大きな斑点となる。下の葉から発生し、病気が進行すると上葉にも多くの病斑が形成される。

密植を避け、過湿にならないよう管理する。また風雨にさらされると発生が多くなるので予防に努める。

##### 【害虫】

アブラムシ類、ハモグリバエ類、ハダニ類、葉や花を食害するヨトウムシ類、茎に侵入するメイガ類などの被害が見られるので、発生初期に防除する。

#### 6 ワンポイントアドバイス

- 連作を嫌うので、1 作栽培したら 3 年間は栽培しない。
- タネの寿命が 1～2 年と短いので新しいタネを使う
- 1 本立栽培を基本としてピンチ栽培はしない。